396
346

山林都市

×
複写

始

FOREST CITY

山林都市

（以印刷代金）

396-346

序

此の山林都市一名林間都市は都市と工業とを研究して居る私の「ユートピヤ」である、「ユートピヤ」は實現の價値なき夢だと云つて嘲つた時代は過ぎ去つた、「ユートピヤ」は事實に於て文明の産である、去れば私の此の「ユートピヤ」も、一口に價値なきものとせずに、眞面目に耳傾けられて、何とかして實現する方法を研究してくれられたならば、獨り私の爲めのみならず、社會の爲めにも國家の爲めにも、如何に幸福であらうかと思ふ、其の大意は左記の通りである。

大正十一年五月

國際田園都市及都市計畫協會々員

黑谷了太郎

黑谷了太郎氏贈本

昭和10年11月7日 寄贈

大　意

一、都市集中は社會上諸種の弊害あること。

二、都市集中は都市自身の爲めのみならず國家の爲め甚だ不利益なること。

三、都市集中に基く都市内の弊害を除去するは近代的都市計畫の精神なるべしと雖も我國に於ては之れが頗る困難なること。

四、英國に於ては都市救濟の根本策として都市集中に反對し田園都市を作りて人口の分散（デセントラリゼーション）を企てつゝあること。

五、我國に於ても都市生活を有意義ならしめんが爲めには都市集中を避け、別に新しき町即ち新理想都市を築造せざるべからざること。

六、然かも日本に於ては土地高價なるを以て英國に於けるが如く田園都市を築造する能はざること。

七、我國に於ては山林を利用し田園都市の代りに山林都市を建設せざるべからざること。

八、山林都市は田園都市の精神に基き工業を中心として市街を建設し市民をして衞生的に文化的に生活せしむるものなること。

九、山林都市は都市の文化設備と天然自然の美觀とを併せ有するものなるを以て市民の心は自ら慰藉せられ能率は增進し勞働爭議は之れなきこと。

十、故に社會改良家及科學的工業經營家は是非とも山林都市の建設に努力すべきこと。

山林都市（フオレスト・シティー）

一名林間都市

從來の大都市は恰も誘蛾燈の樣なものであつて、人を四方から引付けて、而して之を殺してしまうのであるが、多くの人は之を知らずに、清らかな農村を見捨てゝ、都市へ都市へと集つて來て、窮屈な住宅に入つて、汚い空氣を吸つて、惡い病氣に罹つて、代る〳〵消へて行くのは、誠に氣の毒な事である。

我國民の死亡者平均年齡は、明治十九年には男が三十八歳一三で女は三十八歳九一であつたが、其の後國民の都市集中が烈しくなつたので、其の年齡が段々短くなつて、大正六年には男が三十一歳七二、女は三十二歳二、平均三十一歳九六と云ふことになつた、而して名古屋は男二十九歳九四、女三十一歳一九、平均三十歳九六で、神戸にては男二十七歳一九、女が二十五歳九二、平均二十六歳五六

で、大阪にては男が二十五歳六六、女が二十六歳〇四、平均二十五歳八四であると云ふ樣な譯で、我國民は都市に集中するに從つて、壽命の幅即ち健康が衰へると共に壽命の長さが短縮して國民としては羸弱となり、社會としては不健全となるので、國家の利害から見れば實に寒心に堪へない次第である。

此の都市集中と云ふことは世界の社會史を繙くまでもなく、西洋では十六世紀に於ける Land enclosure 即ち土地私有制度の認定以後から顯しくなつて、小作人は地主の誅求に堪へ兼ねて、農園を捨てゝ都市に彷ふと云ふことになつた、當時の有樣を書いたものを見ると、大道には憐れなる貧民や、逐ひ出された乞食で充ちて居り、債主に土地を取り揚げられた數千の農民は、飢餓に逼つて居る子供を連れて、裁判所の戸口に立つて土地の回復を訴へるけれども駄目であつて、其儘乞食をして倫敦の市中を彷徨して居るとある、其の結果として田園は荒廢して、都市は矢鱈に膨脹する、細民は益々增加

して、社會上誠に忌はしき狀態となつた、當時の俗謠を見れば

The towns go down, the land decays,
Great men maketh now-a-days,
A sheep-cote in the church.

と云つて悲慘なる產業萬能の社會狀態を諷刺して居る、如此形勢は十八世紀末の產業革命以來、一層甚しくなり村落の人民は年々歲々都市に吸收せられることゝなつて農園は殆んどなくなつて、茫々たる牧場と變つてしまい、都市は不規則に益々膨脹して、家屋は建込む、其處彼處に工場が出來て、交通が頻繁となり、黑煙が天に漲つて塵埃が空を覆ひ、喧しき音や不愉快な響が絕えず神經を刺激して生活の安全を脅かすことゝなり、文明に赴くと共に文明の意義が分らないことになつた、實に相當資產のある者は所謂「ミルリヨナース、サバーブ」に廣大な邸宅を設けたり、奇麗な庭園を築きて、慰藉も快樂も充分に得られる譯であるが、多くの人間は市中の裏棚に

窟居して、日光さへも拜むことが出來ず燻つて居ると云ふ有樣、如此生活には決して文化も幸福もなく日中は工場の煙と塵埃の中に働いて夜は汚い陋屋に寢て居つては何の慰藉も快樂も得られない、其處には犯罪の卵や結核の黴菌が養成せられて自ら滅び行くのみならず其の害毒を社會に流布して各人の幸福や國家の安寧を損ふことゝなるのであるが我國に於ても戊辰以後社會狀態が一變して都市集中の弊害を蒙りつゝあるのである、我國に於ては英國に於けるが如き「インクロジュア」の弊害を受くることは少ないけれども、侍級が秩祿を奪はれて大都市に集つたり、敎育を受けた青年が鄕里に於て衣食するに足らざるを以て、職を求めて商工都市に集中せらるゝことは爭はれぬ事實である、戊辰以後は我國に於ても產業革命の餘波を受けて工場工業が弗々勃興することゝなつたが、我國は西洋各國と異つて天然資源の蓄積が極めて貧しいのみならず石炭の分布が兩極端に偏して居る爲めに工業の分布も極めて惡しく、多くは六大都市

及洞海灣附近に集中せられて、だらしくなく發達して居る、其の結果として人口も其處に集中せられて、黑煙や塵埃や小動物や黴菌と同居して居る、心なき人は此の狀態を見て都市が大きくなつたと云つて悅んで居るが、焉んぞ知らん其の細胞たる市民の多くは九尺二間に窟居して僅かに家族を臥かすに足る丈けである、殊に今日は住宅が拂底して家賃は目の飛び出る程高くて間借生活をなし居るものも亦尠くない、此等は家に住んで居ると云ふよりも寧ろ收められて居るも同然にて生活して居ると云ふよりも寧ろ棲息して居る丈けで其處には文明の光も文化の風も入らんのである。

こんな處に住んで居る人には靑空さへも望み見ることが出來ない、況んや自然の綠や四季の美しき色彩を見ることは出來ない、故に其の感情は自ら荒み果て犯罪の起るのは少しも怪しむに足らない、六大都市の存在する三府三縣の犯罪件數が全國の其れの約三分の一に達するのも決して不思議はない、其處には輝々たる日光も入らない

其處には新鮮なる空氣も入らない、故に黴菌は悦んで繁殖して全市に蔓延する、病人や死人の多いのは當然である、病院や墓地が幾ら多くとも足るべき筈はない、如此は都市の悲慘と云はずして何と申しませう、實に如此悲慘より都市を救濟し樣と云ふのが英國の都市計畫であるが日本の都市計畫は果して同樣であるや否や甚だ疑問である。

英國の都市計畫の精神は社會改良家たるロバート、オーエンやジエームス、シルク、バツキンガムやエドキン、チヤツドキツクの社會政策から發足したものと云ふことが出來る、オーエン氏とバツキンガム氏とは社會救濟の見地から自個の資本を投じたり株式を募集して新都市の建設に努力した、其の計畫は不幸にして蹉躓したけれども其の志は決して滅せずして今日の田園都市を產んだものとも云へるのである、チヤツドキツクは英國の社會事業の基礎を築いた人であるが、同氏は主として在來都市の改良に努め以て現在の都市計

畫法を產み出したものである、實に同氏は社會改良の第一着步は國民の健康に在りとなし、衞生事業に全力を注ぎたるのみならず熱血を振つて工場法や貧民法の改正や社會保險や住宅問題の基礎を築いたのであるが、其の衞生條例から建築條例が產れ、建築條例から更に都市計畫條例が產れて來たのである、されば英國に於ける今日の都市計畫は米國の其れとは異り、全く此等の社會改良家の精神に基いて、都市生活の弊害を救はんとする一種の社會事業であると言つて宜しいのである、然るに如此事業はもと〳〵容易の事業でない爲めに都市生活の悲慘は十九世紀末に於ても依然として顯しいのでエネベザー、ホワード氏は之を見兼ねて「明日の田園都市」を著はし根本的に都市の悲慘を救治するには矢張りオーエン氏やバツキンガム氏の企ても樣に田園都市を作り、以て人口の分散即ち「デセントラリゼーション」を計り、而して其處に人間としての意義ある生活を營ましめねばならぬと絕叫したのである。

其の叫は最初は空想家の夢想に過ぎぬと嘲けられたが、豈に計らん同氏の理想して居る田園都市はボンヴキールのチョコレート製造會社のジョーヂ、カッドバリー氏やポートサンライトの石齡製造工場主のキリヤム、レヴァー君に依りて其の著書の出版前に實現せられて好成績を擧げて居ることを知るに及んで、ホワード氏の理想は初めて眞理であると云ふことが分り現在の都市其物も田園都市化をしなければならぬと云つて田園サバーブを計畫することになり今日では英國の都市計畫は殆んど此の精神に依りて實行せられて居るものと云つても宜しいのである、然るに日本に於ては如何であらう、法律上都市計畫と稱するは交通、衞生、保安、經濟等に關する重要施設の計畫を謂ふとあり、社會的施設の計畫も其の中に含んで居ないことは云へないが之に關係して居る人々や之に就ての論議から想像するに、日本の都市計畫は全く實利主義から出發したものであつて迎も社會改良などゝ云ふことは夢にも考慮してない樣に思はれる、其

の證據として孰れの都市に於ても倫敦や紐育や士加古の樣な大々都市を作らうとして居る、倫敦の都市計畫家は都市の大々的膨脹は社會上經濟上忌まはしきことであるから衞星都市を作つて人口の「デセントラリゼーション」を企てゝ居るのに、日本に於ては恰も其の正反對に都市集中を推奬して何んでも、かんでも「コンセントレート」しやうとする傾向を示して居る、之れでは高速度の交通機關が幾ら出來ても混雜を救ふことが出來ず、益々混雜を增す許りであるのみならず、社會上經濟上甚だ面白からざることゝなるのである、尤も日本の都市計畫に於ても衞生と云ふことは多少考慮せられて建築物法には建物面積の制限はないでもないが、事實此の規定に依つて人間生活に必要なる空地は保證せられない事情がある、日本人の頭には土地を可成集約的に使用するのが經濟であると云ふ穿き違ひの經濟觀が凝り固つて居る、之は澤庵と梅干を喰べて居れば一番經濟であると云ふのと同然である、されば勞働者の如き、高い「アパ

ートメント」を造つて之に收容したら宜しいと云ふ說が隨分有力である人間を積み重ねる位なら先づ以て商品を積み上げて貰ひ度い、日本の都市には到る處に貧弱なる小賣店が土地を領して居る、こんな物こそ大きな「デパートメントストア」に收容して欲しい、商品なら兎も角、人間を積み重ねることは衞生上、保安上甚だ不良なるのみならず米國都市に於て目下苦しんで居る交通上の混雜を來たす基である。

如此日本に於ては往々人間を貨物より安つぼく見て居る處より勞働者の住宅は工業地域內に置けば宜いと云つて居る人の尠くないのは毫も怪しむに足らないけれども如此は日本古來の道德を無視して西洋式の「オートクラシー」から來た思想で人道上甚だ宜しくない許りでなく、衞生上甚だ惡いことは勿論、科學的見地より云へば所謂整調（コーオーデネーション）の原則に背く譯にて經濟上之れより不經濟なものはない工業地域と云へば夫れ〳〵工業に必要なる運河とか鐵道とかを開設

しなければならない譯であるが、此等は必ずしも住居に必要なものではない、必要のない者の爲めに開設したり延長したりすることは不經濟と云ふよりも寧ろ浪費と云はざるを得ない。

乍去西洋でも十九世紀までは實にこんな風であつた、而して目的とする所は單に人口の增殖と金儲とに止まつて居つた爲め、其の計畫としても唯々產業の發達に資せんが爲め交通の便利を計ると云ふことゝ、「ヴアニティー」の爲めに都市を美化すると云ふ位が關の山であつた、其の結果として都市に迷ひ込む者は愈々多く、其の弊害を受くる者も益々多きを加ふる所以である、早い話が大阪を見れば甚だ明かである、家屋があんな風に密集してしまつたら、都市はお仕舞である、如何にも金のある人は鳴尾でも西の宮からでも通へるであらうが、金のない人は嫌でもおうでも、あの（せ）逼き込んだ町の中に住んで都市の總ゆる害毒を蒙らなければならぬ、大阪には總ゆる犯罪が行はれて病人や死亡率の多いのは少しも不思議ではない。

如此は獨り大阪許りではなく大都市と云ふ大都市は大阪と同樣な運命を持つて居るのである、何となれば皆都市集中を悅んで、百萬の都市は之を二百萬となし、二百萬の都市は之を四百萬にしようとして居るのみならず狹い處に人間を押込んで更に之を積み重ねることを以て經濟的だと考へて居るからである。

されば私共の目から觀れば大都市の周圍には田園サバーブを作つて、此等の弊害を除き度いものであると思ふけれども、叙上の如く勞働者なんかは「アパートメント」に收容するが宜いと云ふ位なれば吾人の理想する田園サバーブは迚も〳〵出來る筈がない、縱令之を作らうとしても、日本に於ては非常に困難な事情がある、西洋では郊外の土地は非常に安いけれども、日本に於ては目玉の飛び出る程高いのである、何故高いかと云へば全く土地投機の結果である、米や野菜を植へて置けば一反に付三十圓乃至五十圓の小作料を得るに過ぎないので、之から還元すれば三百圓乃至五百圓しか價値のない

土地が、五六千圓は愚か、二三萬圓もすると云ふ有樣、こんな高い土地にどうして低廉なる田園住宅を供給することが出來ませうか。

されば人間として人間らしい生活を營ましむる爲めには、ホワードル氏に從つて別に都市を築造するより外はないと信ずるのである、此の見地から英國に於けるが如く、大都市を離れて別に田園都市を造ることが出來るならば、極めて便利であるが、日本に於ては中々容易でない、日本では三百町歩や五百町歩の土地を纏めて購入することは殆んど不可能である、而して現行法規に於ては市の計畫を離れて土地收容も出來ない、縱令出來る樣になつても、西洋と異り、土地が中々安くはない、英國に於ては都市を離るれば大方牧場なるが故に地價が非常に安いのみならず、新都市の築造に適當なる場所が澤山あるが、日本では田か畑である、而して其の價は縱令思惑が餘り入つて居らぬにしても、決して安くはない、田であつても一反歩七八百圓もする、畑でも五六百圓を拂はねばならぬ、其處に相當

の都市的設備をなせば隨分高いものになるのである、故に日本に於ては田園都市を作るにしても、事實容易の事業ではない、唯々庭園を有する住宅地を設ける位の事にて、本統に自然に接近して工業の疲勞を農園趣味にて慰藉することは思ひも寄らぬことである、故に日本に於ては各人平等に人間らしい生活を營まうとすれば、山林都市を作るより外之れなきことゝ思ふ。

實に從來の日本人は悟りを開いて居るのか神經が遲緩であるのか知らないが、都市生活の不安を感ずることが薄いのみならず、矢鱈に都市を憧憬する癖があつて裏棚の薄暗い陋屋に住んでも、矢つ張り東京が愉快だとか、大阪が面白いと云つて、愛兒愛妻が絶えず危險に曝らされて居ることを知らんのである、乍去段々教育が進んで各自の理想も自ら高くなり、淺草や道頓堀のどんちやんよりも、眞善美に向つて渴仰し、新橋や新地の豪遊よりも、家庭の快樂を要求し、眞に日常生活に就て覺醒して來たならば、改良し難き日本の都

市生活には愛想の盡くるときが來るであらうと思ふ、陶淵明でなくとも必ずや歸去來を謠つて田園に歸臥し度いと想ふであらう、殊に日本人は本性として天然自然を愛する國民である、日本の某階級の人には支那人の樣に暗い家でなければ金が儲からぬと云つて、態々家屋を不衞生となし、粥を啜つても金儲が第一、義理を缺かうが恥を搔かうが、お金が大事、金は生命、成金を以て立志編中の偉人と謳歌したり、金儲は人生の目的と信じて居る人もないではないが、如此は日本人の本性ではない、日本人は九尺二間に窒居して居つても一輪挿を慰んで居り、一坪に足らぬ空地にも躑躅や南天を植込んで樂んで居り、若し出來るなら、相當の庭園も持ち度い、餘裕だにあらば山水の眺も得度いと思ふ心は何人にも潜んで居ると私は信ずるのである。

乍去一旦教育せられて文化を味つた者は在來の農夫や樵夫の樣に單に土を掘ぢくつたり、木を切つたりすることのみを以て滿足出來

ない、矢張り他面に於ては都市特有の文化施設を要求するのである
されば農村は都市的に設備し、都市は農村的に調理することは社會
上最も必要なことであるが、從來だらしなく出來上つたものを繕ふ
ことは容易のことでない、殊に日本の都市計畫は小都市の改良や農
村の都市化を豫想して居らないので、我々の理想の實現には不便で
ある、されば我々の理想を實現するには別に新しい町即ち理想都市
を造るより外ないのである、之れが爲めに英國に於けるが如く、容
易に田園都市を築造することが出來るならば甚だ結構であるが、之
れは敍上の通り平地に於ては土地が貴い爲め所謂田園都市を築くこ
とは困難なるが故に、寧ろ山林を開拓して、理想都市を作つた方が
得策であらうと想ふ、

日本に於ては目下山林を利用して國立公園を設立し樣と云ふ說が
喧しく宣傳せられて居る、米國の如く「ミルリヨナー」の多い國には
這種の貴族的計畫も或は必要かも知れないが、日本に於ては如此計

畫よりも山林都市の開拓が緊要であらうと思ふ、上高地にヨセミテ
が出來、十和田湖にイエロウストンが出來ても、我々貧乏人は其の
恩典に浴することが出來ない、兎も角、之れに依りて一日の歡を樂
しみ得る人は極く少數であらうと思はれる、併し之れも特殊の人に
は必要であり一種の文化運動なれば無いよりは有つた方が宜からう
けれども、苟も社會全般の利害に顧れば、山林都市の建設の方が緊
急であらうと思ふ。

我國は他國に比すれば平地が極めて尠い故に、日本人は土地を惜
んで生活に必要なる土地さへも儉約して居るが、其の代り日本には
山林は澤山ある、全面積の約七割は山林と云つても宜しいのである
之を有効に利用して文化を移入することが、刻下の急務ではないで
あらうか、平地は敍上の如く尠い爲めに、其の價は非常に高いけれ
ども、山林は之れに反して極めて豐富である爲めに、一括して廣い
地面を得るに便利なるのみならず、其の價も亦甚だ低廉である、加

ふるに山林に於ては風景も善く、自然の聲色を味ひ得る所が頗る多く其處には谷の戸出づる鶯の美しき聲も聞へ、緑り色濃き森の茂りも見られ、其處には又唐紅にくゝられた紅葉の錦も眺められ、涓々たる清き流の音も聞へるのである、此處に都市の敷地を需むることは經濟的でもあり、衞生的でもあり文化と天然とを樂しむ上に於ても最も得策であらうと思ふ。

然るに論者或は日本の山林は丘陵ではなく、多くは山岳の急傾斜地に在るので都市を作るには不便であると云ふかも知れない、實に山間に於ては都市を作るに便利ではないけれども、印度其の他の熱帶地に於ては「サナトリユーム」とか「夏の都市（サンマータウン）」とか云つて、山上にすら都會を築造して居るのである、我國に於ても從來温泉場の如きは山間に築かれてある、然かも日本の温泉場は殆んど都市計畫的の注意を拂つてない爲めに山間都市としては一向に價値はないけれども若し之を「ランヅケープアーキテクト」の手を借りて、甘く道路

や家屋を配置したならば、平地都市よりも、却つて趣ある都市を築造することが、出來るであらうと思ふ。

元來都市の食料は工業であるが山林に於ては工業の動力を得ることが極めて容易である、日本在來の都市は概して石炭を得ること容易でない、假令得らるゝにしても其の價格が不廉である、假令今は不廉でないにしても將來は騰貴するのみならず、今に拂底するに違いない、今日の採炭增加率で行けば七十五億の炭量は百年も經たぬ内に盡きてしまう、將來の動力は可成石炭を節約して水力に依らねばならぬ、水力の淵源は山林である、其處には電力に「コンヴアート」するまでもなく豐富な動力を得ることが出來る、之に依りて林産物を原料とする工業は勿論、生絲や絹織物や時計や細貨等の製造工業を起せば、其の都市を養ふ丈けの要素は立派に備はることと思ふ更に之を電力に變形すれば電燈も點けられ、電車も廻され、ケーブルカーも動かされ、谷間〳〵に電力の分配も出來、非常な便利な

譯である。

乍去外界との交通が不便であつては都市は成立しない、其れ故山林都市の敷地は鐵道又は軌道の沿線を選ぶか、將た舟楫の便ある海邊に需むるの要あることは勿論である、若し夫れ其の敷地が舟楫の便ある海邊に需むることが出來るならば、其の工業は輕量品に限らず重量品の製造にも適し、非常に便利な譯である、要するに這種の交通機關を有する所又は有し得べき所に敷地を選み相當の土地を求むることが必要である、其の面積は一千五百町歩乃至二千町歩もあれば結構である、英國の模範的田園都市たるエルキンは九百七十二町歩でレッチヲーズは一千八百町歩であるが山林都市は田園都市よりも稍廣きを要することゝ思ふ。

如此にして土地を得たならば最も合理的に都市計畫をなさなければならぬは勿論である、先づ以て此等の交通機關と連絡するに最も都合好き地域即ち山間であつたならば停車場附近、海岸であつたな

らば波止場附近に工業地域を設け引込線を設くるなり運河を堀るなりして其處に前記の工業を纏めることも亦甚だ肝要である、而して其の工場を科學的に配置すれば其の面積は幾くらも要らんのであるあるとせられて居るが故に、田園都市や山林都市に於ては百分の五も要らない位である。

然り而して乘客停車場即ち交通の中心點とも云ふべき地點の附近に商業地域を劃し其處に都市的中心を設けるの要あるは勿論である其の場所は乘客停車場と工業地域との間にても宜しいかも知れないが、工業地域が鐵道線路の東側に在るならば、商業地域は其の反對の西側に置いた方が理想的であらう、其の面積は全面積の百分の一も要らぬ、千分の五もあつたら澤山である、元來都市なるものは支那の都市や我關西都市の如く商店家屋を以て充たされては堪まつたものではない、其の商業地域の中には都市の中心機關たる市役所

や市會議事堂の設置を要することは勿論であるが、其の他に一般市民が何時にても集會を催したり集合したりする公會堂がなければならぬ、其の公會堂は今日の所謂公會堂の如く、演說會や講演會や演藝會場に充てられる許りでなく雨天公園の役目をも勤めねばならぬ日本の從來の都市は個人個人の烏合に過ぎないので社交機關は農村よりも缺乏して、本當に都市的機能を發揮すること出來ないが、將來の都市はこんな事では無意義である、都市は各種の人間に社會化の機會を與へることに依りて、文化を助け、都市其の物の存在を有意義にする譯なれば這種の公會堂は都市に採りて最も必要なものと思ふ、一度町に出て買物なり、散步なりした人は一寸其の公會堂に立寄り多くの人に邂逅する機會を作ることは甚だ肝要である、其處には無論音樂堂もなければならぬ、只臺(フリーベンチ)もなければならぬ、喫茶の設備もあれば尙更結構である、大勢の間に座を占めて音樂を聽き乍ら知己と談笑する機會を得ることは社會人としての人間の性格を

研磨(ポリシ)して文化を向上する爲めの第一要件である。

其處には又「デパートメントストア」や「バザー」の設備も是非とも必要である、此等は各階級の需要を充たすものでなければならぬ、日本の百貨店は概して貴族的のものであつて公衆的でない嫌がある如此も流行の中心として都市には必要でないことはないが、今少し公衆的のものもなくてはならぬ、其の他に各種の商店を要することは勿論であるが、交通運輸に關する商業は停車場附近に纏めねばならぬ、小賣商店と雜居することは甚だ好ましくない。

山林都市には別に「ビズィネスクォーター」と稱すべき事務所專用の地區は要しないだらうと思ふ、然かも此等の事務所も小賣店と混在して菓子屋の隣が保險會社で唐物屋の隣が銀行で小間物屋の隣は何々會社の事務所だと云ふことは町の體裁も惡るいのみならず非常に不經濟(デスオルダーアンニコノミック)である、不規律は不經濟の基であればである、故に一階は原則として小賣店舗に用ひ、事務所は可成二階以上に上げる方が宜

しからうと思ふ。

商業地域の中には又娯樂の中心を置かねばならぬ、其處には劇場や活動寫眞館や寄席其の他の觀物場を設くるの要あることは論を俟たない、乍去這種の興行は在來式の如く餘りに營利化(コンマーシアライズ)した俗惡のものは好ましくはないのみならず、却つて有害である、營利と文化とは沒交渉の場合が多い、娯樂の如き重要なるものを、營利を目的とする興行者に委したと云ふことは大なる間違であつて、先進國の都市改造者の後悔して居る所である、故に山林都市の興行物は文化や教化を旨としたものでなくてはならぬ、市民の素人芝居や演藝會等を社會化して一般市民に觀せることなどは最も歡迎する所である。

元來人間は一種の向光動物であるが故に晩食後散歩をするにも餘り暗い處や寂しい處を好まない、可成明くて賑やかな處を選ぶのである、故に山林都市に於ても是非とも如此場所を要する、商業地域

は買物(ショッピング)や見物の爲めのみならず、夕刻の散歩の爲めにも相當の設備を要することゝ思ふ、「バー」などは必要ないかも知れないが、最も平民的な喫茶店を設けて音樂を聞き乍ら茶やラムネ位を飲み、晝の疲れを回復する場所も必要であらうと思ふ。

而して其の周圍は大體に於て住居地域となさねばならぬが、谷間谷間に副中心を置き其處には日常品を販賣する市場を配置すると同時に同方面の集會に充つべき倶樂部位はなくてはならぬ、「スケートリンク」の樣な室内運動場も欲しいものである。

中心と副中心とを連絡する主要道路は地形にして許すならば其の兩側に限り商業地域として小賣店を比べて其の道路に明るみを與へることも無用ではない、併し之を商業地域とするならば其の間に住宅は介在しない樣にしなければならぬ、法律に於ては住宅と商店と混在することは禁じてないけれど之れは決して宜しいことではない何事も科學的に且つ經濟的に處理するには整格(コオルデネート)することが最も

必要である、住居地域の内に商店の介在することは餘り好しくないが如く商業地域の中に住宅の散在することは互に其の効果を妨ぐる所以で宜しくはない。

而して其の外廓の住居地域の中には文化を目的とする中心がなければならぬ、其處には是非とも圖書館がなくてはならない、若し市の財力が許すならば藝術館や博物館等も欲しいものである。市として一つしかない學校は矢張り其處に纏めた方が宜しい、小學校や運動場は適當の距離を保ちて所々に配置すべきである。

而して最も恰好な谷間を利用しては其處に野外集會場を作ることも必要である、之を野外劇場や野外競技場に充つれば至極結構であらうと思ふ、山林都市に於ては四圍が悉く公園的になつて居るので特に公園を設くるの必要はない位であるが、併し天然自然も人工と相待つて一層其の美觀を發揮すべきが故に、山林を開拓しては所々に公園的施設を施すの要あることは勿論である、若し平地にして充

分あるならば其處に整形的（フオーマル）な公園を作ることも必ずしも不必要ではない。

而して住居地域に於ては地形に應じ合理的の宅地割をなし其處に宅地に相當する住宅を設けしめねばならぬ、此の場合に於ても整格（オーション）が必要である、地區に依りて一定面積に建築すべき家屋の一定數を定め家屋の大小、並に建築の體裁を整へねばならぬ、而して社會的交際を密接ならしめんが爲め、可成社會的階層を纏むるの要がある、而してレッチヲーズやエルキンに於けるが如く工場に通ふ人の爲めには工場に接近する住居地域を割愛しなければならぬとは勿論である。

住宅の敷地は六十坪を最小とし百坪を標準としなければなるまいと思ふ、而して空地の面積は建物面積の二倍を最小とし三倍を標準としなければならぬ、其の空地に於ては各々庭園を造りて花卉を樂しむなり、野菜を作りて新鮮の食料を得ると共に、天然に近づいて

土壌に親しむ樣にしなければならぬ。

而して住居地域の周圍に相當の平地か緩傾斜地があるならば、英國式田園都市の樣に、其處に農業地帶を設定することが最も理想的である、若し如此農業地帶が得られるならば、ボンヴキールやレッチヲーズに於けるが如く、之を市民に貸付けて農耕趣味を養ふの必要がある、乍去日本の山間地方に於ては平地も緩傾斜地も割合に少いので、如此農業地帶を設定するの餘裕はないかも知れぬ、宅地割を犧牲に供してまでも、農業地帶を設くるの必要はない、又急傾斜地を耕作することは、國土保存上好ましからざるが故に、強て農業地帶を求むるの要はない。

併し其の代り山林都市の外廓には是非とも山林地帶を設定して山林の經營を樂しましむる樣にしなければならぬ、地形の如何に依りては果樹の栽培の如きは最も奬勵すべきである、又日本としては山地を利用して食物を得ることが最も必要なるが故に其處に薇、蕨、荀

茸、葛、片栗、山芋等を作るのも必要である。

兎にも角にも工場や事務所より歸宅すれば、鍬を採りて土地を耕やしたり花卉や菜果を培養したりするのみならず、山に薪を拾つたり林に茸を採つたりして天然自然と交つて、工業や事務の疲勞を醫すると共に、山や川の慰藉を受けさしたならば、勞力の能率も自ら增進して工業の發展も如何に多大であらうかと思ふ。

如此配置は悉く適當の步行距離の範圍内に於てするを、原則としなければならない、而して市内には電車の如き不經濟なものを要しない樣にしなければならぬ、世には市内に電車を有することを以て名譽と考へて居るものもあるが、之れはとんでもない間違である、都市が不經濟な電車を要する所以のものは都市の不秩序を證明するもので總て配置が科學的に整列せられたならば、如此危險物は必要がないのである、總てが適當の步行距離に配置せられて、日々工場に通ふにも事務所に行くにも十五分か二十分位外氣を呼吸して、步い

て行く樣にしたならば、衝突の虞もなく病氣傳染の憂もなく、衞生的で保安的で且つ經濟的な譯である。

而して其處に建てらるべき建築物は從來の日本都市に於けるが如く雜駁なものでは甚だ困る、不同（ディヴァーシティー）は進歩の母と云ふけれども意義なき不同は却つて進歩を妨げ美觀を損するのみならず、頗る不經濟である、其の中特殊建築物は一定の規定を超へて、之を羈束することは甚だ面白くないけれども、普通の住宅及商店は格を整へて等級毎に標準（スタンダーダイズ）を設け、之に準據せしめねばならぬ、銘々思ひ思ひに建築するときは費用が嵩む許りで決して近代的ではない、昔の樣に餘裕を以て家屋を建てた時代は個人的趣味に基いて、勝手に設計して建てゝも文句はなく、やれ石撞きだ、やれ棟上げだと云つて一生一代の祝儀の樣に大騷ぎして、無駄に金を使つても構まつたことはなく、今日に於ても富豪階級は昔の樣に勝手に數奇を凝らしても、差閊へはなからうけれども、家屋の大多數は人間生活の必需品

であつて贅澤品ではない、如何なる貧民と雖も家族五人あれば十坪の居室は要るのである、之れに臺所其の他の附屬室を加ふれば十五六坪は何んとしても必要である、此の坪數は文化も向上も意味しない最小限度なので、苟も人間として意義ある生活を營ましめんとするならば少くとも二十坪は必要であらうと思ふ、更に人間として人間らしい生活をなすには一人に付三坪乃至四坪は必要なのである、而して家族として生活するには其の數に依りて所要室數に於て多少の差異ある譯であるが、其れにしても是非とも必要な室數は自ら決定して居る譯である、實に家庭としては茶の間、食堂、客間、書齋等の爲めに何んと儉約しても二室は要する、其の外に夫婦限りの家族ならば寢室として更に一室を要する、子供があれば二室を要し、更に舅姑があれば三室を要し其の上空室（スペアルーム）が今一室あれば誠に好都合である、兎も角勞働者であらうが俸給生活者であらうが、人間が人間として人間相當の家庭を作り人間として意義ある生活をなさんと

すれば五六室は必要であると認められて居るのである、ポートサンライトやボンヴヰールの職工宿舍の如きも皆此の標準に從つて作られて居るのである。

各室の面積も區々にては困る、自ら最小限度もあり、標準もなければならぬ、西洋に於ては夫々研究せられて居るが日本に於てもちやんと其の標準を決定すべきである、

斯くて其の標準に從つて家屋も機械にて製造すれば、うんと安く出來るだらうと思ふ、今日の家屋の建築は印度人の寶石細工の樣なもので、手にてこつ〳〵作られるのみならず、注文主に依りて價が異つて引受け得る最高價格で建てられて居るので、安く出來る筈はない人間生活の必要物件が猶太人の中古商買や緣日の植木賣買の樣に取扱はれて堪まつたものではない。

殊に住宅は同じ必要物件でも食料や衣服などゝは趣を異にして肉體よりも精神に影響を與ふること非常に多く、德義、品性、趣味の

如きは家屋の感化を受くること尠くはなく、勉强、整理、清潔、經濟的觀念の如きは家屋の構造に依りて一大影響を受け、其の設計が惡るければ勉强も出來ず、整理も付かず、清潔も保てず、自然に不衞生、不經濟となり、家屋が宜しければ其の精神も自ら敎化せられて文化的になることは今更吾人の喋々を待たぬ所である。

家屋は實に如此人間生活に採りては必要にして且つ重要のものなれば昔の大名は家を建てて我々に貸して呉れた、今でも殖民地に於ては官舍制度や社宅制度があつて使用人の爲めに便宜を與へて居るが、山林都市の事業家も須く此の方法を採るべきである、然かも在來の組織で、こつ〳〵細工をして居つては低廉なる家屋を得ること困難なるが故に、之れは山林都市を經營するものが、其の副業として建築事業を營むか、將た特別の建物會社を立てゝ機械を以て煉瓦其の他の建築材料を造り、機械的に家屋を建築せしむるの方法を採らなければならぬことゝ思ふ。

如此設想の下に各地區の土地の利用法が定まつたならば、道路系統を計畫して道路を築造しなければならぬことは勿論である、從來の自由放任主義の都市計畫に於ては土地の利用法も何も定めずに、矢鱈に道路を計畫した時代もあり、今日に於ても尙ほ何等の目的なしに用器畫を描くが如き心持にて、道路計畫をなしつゝあるものもある樣に見受けられるが、之れは目論見なしに家を建てゝ家が出來てから、座敷や臺所を定める樣なものにて、飛んでもない間違ひである近代的都市計畫に於ては先づ土地の利用法を定めて、然る後に道路計畫に取り掛るを原則とする、山林都市に於ては特に其の必要を認めるのである、此の原則を知らぬ人は道路計畫のみを急ぎ、道路計畫が即ち都市計畫だと思つて居る傾がある、之れ土地の利用は所有者の自由である、道路計畫丈けが國家なり公共團體のなすべき事業であると云ふ「レザーフェーア」の思想から胚胎したものにて、近代の都市生活即ち協同生活の意義を解せない爲めに起つた結果で

あらうが、斯くては土地の利用計畫と道路計畫とは常に調和せず、不經濟之れより甚しいものはない、山林都市に於ては決して如此不調和も不經濟も許さんのである。

山林都市に於て道路系統を立するには、先づ以て其の地形に基き其の高低に從つて、適當の計畫を立てねばならぬ、平地都市の道路を畫する樣な態度で立案せられては、折角の天然自然も臺なしである若し夫れ吾人の所謂山林都市に於て海濱又は谷間に沿ひて多少の平地が得られる樣ならば、其の平地を限り格子形式(グリデロンタイプ)の道路を作ることは惡くはないけれども、四圍の山容を顧みずして强て此の式を徹底せしめて、不調和を來たすことは決して宜しくはない、若し格子形とするならば各「ブロック」は可成東西に長く南北に短かくして、孰れの家屋も能く日光に當たる樣にしなければならぬは勿論である乍併紐育や京都の如く道路も「ブロック」も餘りに單調で差等のないのは、周圍其物が藝術的な山林都市に於ては最も厭ふべきことゝ思

ふ、而して平地以外は何んとしても集中式（コンセントリックタイプ）となるであらうが二式の接合點には圓形又は楕圓廣場を配置して竹に木を接いた樣な不自然のない樣にしなければならぬことゝ思ふ、傾斜地に於ては格子形式は餘り感服出來ぬ、如此地形に於ては大體集中式を採るべきであらうと思ふ、處に依りて斜線式を採るも已むを得ないが、矢鱈に此の式を採るのは戒しむべきである、道路計畫をなすものは往々にして巴里式に倣ひ無暗に對角道路を畫いたり、放光道路を作りたがるが、之れは西洋に於ては兎も角日本に於ては甚だ宜しくないことゝ思ふ、這種の道路は稀には必要である、平地に於て中心を作つたり中心と中心とを連絡する場合には必要であるけれども、之を濫用されては堪つたものではない、這種の道路は主として交通の便利と云ふ所から出來たものであらうが、都市は交通の便利に依つてのみ計畫せらるべきものでない、交通の便利のみを考へて、都市を計畫した時代は最早過ぎ去つてしまつた、之れは十九世紀の功利主義

萬能時代のことにて二十世紀以後の都市は人道の上から活動（ヴアイタリティー）の保存や生活の安全と云ふ所から計畫せられなければならない、殊に山林都市の如きは之を主要の目的としなければならないので、交通の便利の如きは二の次である。

されば山林都市に於ては這種の道路の爲めに家屋が變な方角に向ひて日當りが惡くなつたり、三角形の家屋が出來て住まいにくゝなることは決して望ましくない、西洋人は其の三角形をも甘く利用する方法を講じて居るが、日本人は之れが不可能である、日本人の性格としては大體に於て三角形殊に鋭角を好まない、三角の室は物置にも適しない、我々の所持品にて三角な物は定規位なものにて其の外は圓いものでなければ大方四角である、細胞を顧みずして妄りに骨格を仕組まれては堪まつたものではない、さりとて這種の道路に沿ひ數多の三角形の「プロット」が利用せられずに殘つて居るのを見るのも餘り氣色の宜いことではない、要するに如此無用の眞似事は

しない方が增しである。

惟ふに山林都市の道路計畫は「ランズケープアーキテクチユア」の範圍に屬し私には能く分らないけれども、大體其の系統は高低に從ひ楓葉の葉脈狀に計畫しなければならぬことゝ思ふ、而して可成堀割つたり切崩したりしない樣にし度いものである、假令之を行つても餘り不自然でない樣に天然の美形を損はない樣にすることが肝要である。

而して山間に於ては原則として中央に溪川が流れて居るであらうが若し之に沿ひて道路が開かれるものとすれば主要道路に限り、複線式を採つて、溪川の一方に主要の道路があるならば他方に於ても之れと同格の道路があつた方が宜しからうと思ふ、而して其の二道路が谷間谷間の副中心に於て會合する樣に花輪狀に計畫したら宜しからうと思ふ、之れも地形を顧慮せずに强てやることは宜しくないが、若し出來るものなら「シムメトリック」になつて居つた方が萬事

都合好くはないかと思ふ、若し夫れ斯くの如く市民の多く集合する所から複線式を採つたならば交通を整理する上に於ても便利であり混雜と單調からも免れることが出來る。

人口が幾萬あつても主要道路が單線の場合は市街が單調で薄つぺらい樣に感ぜられる、而して多くの場合は路幅が郊外も市中も同一な爲めに時として非常に混雜を來たすのみならず連日往復する者に採りては退屈を覺へしむることが多いのである、町に出ても同じ道を往復することは氣の利かぬ一つである、散步に出ても、同じ道を逆戻りすることは愉快を冷却する傾がある、今日の學問は何んでも心理學的色彩を帶びて來たが、都市計畫の如きも之れを考慮せずに完全に出來るものでなからうと思ふ、殊に山林都市を造るには道路を計畫するにも能く人間の心理を基礎として計畫しなければならぬことゝ思ふ。

二等三等の道路は此の主要道路より葉脈狀に分岐せしめて夫れ夫

れ連絡する樣にしなければならぬが、之れは地形や高低に應じ、千差萬別でなければならぬ、其れにしても各道路は孰れも車の通れる樣に緩勾配にしなければならぬことは勿論である、併し之れが爲めに迂路を辿らねばならぬことが多い之を防ぐには所々に細い階段道路を造りて、上下道の連絡を講ずることも不必要ではない。

而して市街地の外廓に在る山林地帶に於ては全體を周遊し得る樣に是非とも輪環道路を設けなければならぬ、之れも內輪と外輪と二重なれば一番宜しいだらうと思ふ。

之等の道路は山林都市に相當する標準を定めなければならぬことは勿論である、道路は山林都市に於ても原則として歩道車道の區別はなくてはならぬ、車道は主要道路に在りては片側三線を單位とし全體にて六線としなければなるまいと思ふ、速力の等しからざる車輛が同一道路を通行することは宜しくないかも知れないが同じ高速度の車でも時として追ひ越す必要のあることがある、故に二線はど

うしても必要である、此の上交通の頻繁なる處には停車に備ふる爲めに、もう一線を保留するの要がある、最も山林都市には電車はないが電氣自働車はあるものと見なければならぬ、電氣自働車は燃料節約上我國に於て最も必要であるのみならず、山林都市には最も適當なものなればである、乍去二等道路の車道は片側二線合計四線にて事足るべく、三等道路の夫れは回轉の出來る程度又は一線づゝ二線にても宜しいだらうと思ふ。

歩道は主要道路に於ては列樹やポール地帶を除き、矢張り三線づゝ六線を要するものと思ふ、歩道二條あれば十二線になる譯である二等道路に於ては二線づゝ四線、三等道路に於ては少くとも合計三線を必要とする、六尺以下の歩道は傘を差せば二人並んで歩くことも出來ず、他人に出會つたら車道に降りなければならず、全く無意味なればである、此の計算は車の一線を八尺乃至九尺、人の一線を二尺とする標準を前提とするものにて其の路幅は有効幅員のみを意

味するものなるが故に、地上架設物がありとすれば其の幅員は更に増加せざるべからざることは勿論である、要するに市街の中には地域地區の狀態に應じ車の多く通る道路と、人の多く歩く道路とがあるので、車道は二等道路の規準に依るも、歩道は三等道路の標準に從ふべきものもあり、車道として三等道路でも、歩道として二等道路たるべきものがある、されば標準を定むるには豫め細心の注意を以て諸種の標準を定めねばならぬことは勿論である、而して其の道路は「プロット」の面積に鑑みて甘く整調(コーオデネート)して「プロット」が少さいのに大きな道路を作つたり「プロット」が大きいのに道路が狹かつたりする樣なことのない樣にしたいものである。

而して道路は原則として舗裝を要するものと思ふが、全體に亘りて舗裝が叶はなければ、せめて主要道路なりとも舗裝を施したら宜しからうと思ふ。

要するに山林都市は人道や社會改良の見地から、最も衛生的に、

最も安全に、最も便利に、最も愉快に、最も經濟的に、最も文化的ならしむる爲め最も合理的に建設しなければならぬことゝ思ふ、然らば之を如何にして造るかと云ふ質問も出るであらう、其の方法としては英國に於て田園都市を作つて居るが如く、信託會社を興して建設することも一策であるが、日本に於ては單に此の目的丈けにては容易に實行し難い所であらうと思ふ。

惟ふに都市は工業を離れて生存し難きが如く、山林都市の建設も工業家を離れては成立すまいと思ふ、我觀を以てせば工業家を中心として、此の計畫を進めるのが一番捷徑であらうと思ふ、職工を五六千人も使用する工場ならば一工場にても人口四五萬を抱擁する都市が必要なのである、一千人づつ使用する工場が五つもあらば、矢張り同樣である、されば大工業會社を中心として、這種の新市街を造ることは必ずしも困難ではあるまいと思ふ、臺灣其の他の殖民地に於ては大會社は原則として、社員や勞働者の爲めに社宅なるもの

を供給して居る、内地に於ても都市を離れて事業を經營するときは社宅を供給して居るものもある、鑛山の如きは其の最も顯著なる例である、之れは工業の科學的經營の見地から來たものでもなく、幸福增進策から來たものでもなく、唯單に事業上已むべからざるより出でたるものには相違ないけれども、如此は事業上最も必要なるものである、將來の工業家は在來式經營法に依賴して居つては甘く工業の發展を期待することは出來ない、科學的經營法を採用して先進國に於けるが如く、勞働「コロニー」を作ると同時に工業都市を作るの覺悟を持たねばならぬ、近時歐米に於ては工業の「エキゾーダス」とか「エスケープ」とか云つてイスラエル人が埃及より脫出したるが如く、大都市から逃出す傾向がある、今日の如く所謂大都市なるものが、膨脹に繼ぐに膨脹を以てし、不秩序、混雜、雜踏を來たし品川の人が本所の工場に通ひ、本所の人が王子の工場に通ひ、千住の人が品川の工場に通ふ樣になつて、無益に時と金とを消費して居つ

たならば、何もかも貴くなつて、工業夫れ自身も不經濟になるに極つて居るのである、殊に都市の土地は無制限に暴騰して、工業の侵入を防禦して居るのみならず、地主達は矢鱈に土地投機を行ひ、工業驅逐策を採つて居るので、我國に於ても早晩工業は大都市から脫出したり、大都市から遠く離るゝことゝなるのであらうと思ふ、されば將來の大工業家は能く此の趨勢を洞察して、工業經營の爲めの理想都市を築くの覺悟がなければならぬ、之れは工業夫れ自身の爲めに利益なるが故に、工業家自身之を企てゝも宜しいことであるが然かも之れが資本の利用上、本業以外に多大の資本を投下することは出來ぬならば、社會改良家其の他の人々と協同して別に都市經營の會社か公益法人を設立しても宜い譯である、併し我觀を以てせば工業家を中心として株式を募集し之に依りて、都市經營會社を興こし營利を主とせず工業從事者の能率增進を目的として、工業的山林都市を建設することにしたならば、最も便宜であらうと思ふ、然らば

如此都市を何處に作るかと云ふことが、從て起るべき問題であらうが、之れは大都市に關係なく、單獨に建設する場合と大都市の衞星都市として作る場合と自ら多少の相違がある、單獨に建設する場合は比較的に廣く其の地位を選定すること出來るけれども、衞星都市として建設する場合は大都市を距ること二三十哩の圏内に之を求めねばならぬ、其の地位は前に略述した原則に基いて、選定しなければならぬことゝ思ふが、扨て具体的に何處が適地であるかと云ふことは實地調査をした後でなければ困難である、併し東海道線に沿ひ單獨に這種の都市を建設するとしたならば大磯より山北までの丘陵地方や箱根附近は好適の地方であらう、富士紡績の小山工場の所在地は私の所謂山林都市の建設地として理想的のものである、同會社は同工場を中心として地主組合を作り其處に築庭的都市計畫を行ふと同時に都市的設備を施してくれたならば獨り其の工場の利益のみではなく、一般社會の公益となるであらうと思ふ、御殿場より三島

に至るの間にも適地が澤山之れある樣に見受けられる、岩淵附近も宜さそうに思ふ、大井川の下流に在る牧野原の中にも適地を發見することが出來やせぬかと思はれる、濱名湖の沿岸も地形より見れば頗る良好である、蒲郡、大府附近に於ても、なくてはならぬ所と思ふ、東京の衞星都市としては横濱、八王子間の丘陵地方、大山界隈より青梅附近に至る山麓地方、青梅より鴻巣附近に至る丘陵地方は輪換鐵道だに布設せられたならば好箇の適地となるであらう、習志野、氣賀沼、印幡沼間の丘陵地方に於ても交通機關さへ整へば必ずしも適地を求め難いことはなからうと思ふ、大阪の衞星都市としては武庫川、池田川の上流地方や、泉南の海岸地方や、紀伊川の流域に於て適地を相することが出來るかも知れないが、さなきだに人口過密で功利主義の旺盛なる地方の事とて、如此適地を手に入れ得るや否やは甚だ不確である　其れにしても大々大阪を作り此の上人口を積集して、國民の墓地を擴げるよりは、曲なりにも、這種の計畫

に基いて、人口の「デセントラリゼイション」を企てた方が國家の爲めにも社會の爲めにも得策であらうと思ふ。

要するに其の地位は更に精細なる調査を遂げた後にあらざれば確定する能はざるは勿論であるが、兎も角如此計畫に基いて、山林都市を作つたならば、山林の中に住んで居つても、自ら文明の恩澤を蒙り、諸種の都市的娯樂も得られ、而して從來の都市の害毒から免れるのみならず、永へに天地自然の美なる感情をも樂しむことも出來、何人も低廉に文化生活を營むことが出來るであらうと思ふ、

若し夫れ斯くの如く其の市民が各々意義ある生活を營むことが出來たならば頭腦も健康も自ら改善せられ工業の如きも科學的經營の本旨に適ひ、最も圓滿に發達して勞働爭議の如きは決して起らぬであらうと思ふ、如此にして都市の營養たる工業が進めば其の都市としても完全に發達しない理由はない、故に私は現在の都市生活に惱める人や、社會改良家や、工業の科學的經營者に向つて切に山林都市の築造を勸むるものである。

都市計畫名古屋地方委員會內

青年都市研究會發行

に基いて、人口の「デセントラリゼイション」を企てた方が國家の爲めにも社會の爲めにも得策であらうと思ふ。

要するに其の地位は更に精細なる調査を遂げた後にあらざれば確定する能はざるは勿論であるが、兎も角如此計畫に基いて、山林都市を作つたならば、山林の中に住んで居つても、自ら文明の恩澤を蒙り、諸種の都市的娯樂も得られ、而して從來の都市の害毒から免れるのみならず、永へに天地自然の美なる感情をも樂しむことも出來、何人も低廉に文化生活を營むことが出來るであらうと思ふ、

若し夫れ斯くの如く其の市民が各々意義ある生活を營むことが出來たならば頭腦も健康も自ら改善せられ工業の如きも科學的經營の本旨に適ひ、最も圓滿に發達して勞働爭議の如きは決して起らぬであらうと思ふ、如此にして都市の營養たる工業が進めば其の都市としても完全に發達しない理由はない、故に私は現在の都市生活に惱める人や、社會改良家や、工業の科學的經營者に向つて切に山林都市の築造を勸むるものである。

都市計畫名古屋地方委員會內
青年都市研究會發行

396
346

終